

気をつけましょう

乳牛

◎青草給与の準備◎

乳牛は長い間の飼料作物不足から、からだに変調を来しやすい時期である。冬季間の栄養分が十分でなかったため生じた、毛づやが悪く毛のボサボサした牛、眼の色がどろんとして動作が鈍く歩きぶりの悪い牛、顔がむくんで最近乳量の減り方がひどい牛などの早期発見と治療につとめよう。

このような乳牛に春先一度に青草を給与すると下痢を起しやすいから、青草給与は徐々に行い、十分なれてから本格的に与えよう。

◎甘藷、馬鈴薯中毒防止◎

春先になると貯蔵中の甘藷が腐敗したり、馬鈴薯が発芽して食用できなくなり、乳牛に与える場合があるが、甘藷の黒斑中毒、馬鈴薯のソラニン中毒に犯されないよう注意する。これらのウイルスは煮ても焼いても消えないが、水溶性であるから危険性のあるイモ類は碎細して半昼夜程度水浸し、その水を流した後に給与するように心掛ける。発病した場合は素人療法は避けて速かに獣医師の診療を受ける。

鶏

◎アンモニアガスの害に注意しよう◎

育雛舎 鶏舎等に入って、目がチカチカして、アンモニア臭が鼻をツーンとついて極めて不快な感じのすることをよく経験する。これは鶏糞から発生したアンモニアガスが舎内に充満している証拠である。人がにおいをかいでアンモニア臭いと感じる限界は 53PPM（空気中に 100 万分の 53 のアンモニアが含まれている）であって、鶏舎内に入って鼻、のどを刺激するようになると、空気中には少なくとも 408PPM が含まれるといわれておる。そこで鶏はどのていどのアンモニア濃度に耐えられるかという、20PPM 以上が長期間にわたると何等かの障害が現われるといわれており特に眼の角膜、肺肝ぞう等に変化が起きてニューカッスルその他の呼吸器病に感染する危険率が增大してくる。そこで鶏糞を適時に除去しないと鶏は一日中アンモニアガスに苦しめられ呼吸器病にかかりやすくなっているのである。呼吸器病になって薬とか消毒だとかいって大きわざをする前にまず鶏舎の採糞と適切な換気を図らなければならない。

和牛

◎和牛の種付は2～3月が一番よい◎

和牛の子牛生産経営では放牧をうまく活用することで収益性が高くなるが、放牧期間中に子が付いていないようにすることがよいのです。

それにはこの2～3月に種付すれば、終牧後の11～12月に分娩し、離乳は5～6月ですから放牧開始時には子を離して出すことができ、子はよい草で育成して高く売れる訳なのです。

◎子牛の異嗜に気を付けましょう◎

異嗜は子牛に多いもので、舎飼の間に外へ出すと、土や壁土を食ったり、壁板や飼槽を嚙ったりするのがそれなのです。

これは無機物の欠乏した時に多く発生しますし、また消化器に寄生虫のいる時にもおこります。このような場合には、カルシウム剤を与えたり、ミネックスとか、ミネラル錠等の無機微量要素を配合した製剤を与えます。

また寄生虫があることもありますので、糞便検査をして寄生虫が見つければ、駆除せねばなりません。